
竜のアト

ピヨ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜のアト

【Nコード】

N4497Y

【作者名】

ピヨ

【あらすじ】

寄る辺なき青年は旅をする。幼い少年と少女を連れて——ただ、少女に安住を与える為に。

孤独な少女は無邪気に笑う。初めて手にする温もりに——ただ、純粋に青年を慕って。

仮初めの少年は戯れる。黙する青年を主とし——ただ、ぎこちない青年と少女を見守って。

ある所では邪神とし、ある所では神の使いとし、ある所では怪物とし、またある所では親しき隣人。地方により様々な認識をされる竜

が実存する世界で、旅をする彼らの話。

1 父と娘―1（前書き）

名前の紹介。

鬼灯、紅葉、萩

和風ファンタジーですが、竜の存在以外にあまりファンタジーさは含みません。

不器用な人々の話になれば良いな、と思っております。

つたない話ですが、読んでいただけましたら幸いです。

1 父と娘―1

「換金屋と聞いた。換金して欲しい」

その、珍妙な客がやって来たのは夏の名残を惜しむ初秋の頃。青葉がようやく色を変えようというときだった。

年の頃は店主から見れば若造で、まだ二十歳にも届いていないだろう。

纏う着物こそどこでも見る墨色の着流しだが、髪を纏めている、さやかに柄が入っただけの質素な漆塗りの簪はどう見た所で女物で随分な傾き者がきたものだ、と感心する。

もつとも、こんな職業柄なので荒くれ者や明らかに『訳あり』の者と接する事も少なくは無く、驚きはしないのだが。

腰に下げた刀も、旅人なら珍しい事ではない。

ただし、

「萩っ、萩！みてみて！きれーい！」

「そう慌てなさんな、お姫さんよ。品物は逃げやしないさ」

「むーっ。紅葉は紅葉だよう。お姫さんちがうー」

「主殿の娘つ子なら、おいらにとつちやお姫さんが正しいのさ」

子連れだった。

五歳になるかならまいか、といった背丈の少女と、こちらも十に届くかさ怪しい小童。

幼女の方はくたびれた着物が農民の子供のように見えるが、それにしても随分ボロボロで頭には頭巾のように布を被っており、その顔は窺えない。

対して童の方は作務衣のような上衣の……と考え、思い出す。あの服は甚平と言うものだろう。ここは多くの人や品が集まる華やいだ街の換金屋、そのような珍品にも見覚えがあった。服もさることながら、童は瞳の色も変わっている。

兄弟妹連れかとも思ったが、それにしても青年と童は似ていない。ならば妙に堂々とした風体から、どこぞの名家のお坊ちゃんのお忍びの目くらましに童子の兄妹を連れたか、とも思ったがそれも他に護衛や付き人がいないのは不自然だ。

せめて若い娘でも連れていてくれたのなら駆け落ちだ、などと今晚の酒の肴くらいにはなったのに、と手前勝手な話だが少々落胆する。

「父さま、鬼灯父さま。紅葉は紅葉だよねえ」

幼女は青年の足に縋って、同意を求める。布の隙間から見えた瞳は大きく潤んでいて、頬は子供らしく赤味が差していた。

青年は冷めた瞳を幼女へ向け、それから童へ視線を流す。

「紅葉の望むようにさせよ」

童はやれやれ、と大人びた仕草で呆れてみせた。

「主殿は娘っ子に甘くていけねえや」

「黙れ。店主、これを…店主？」

「え、ああ、すまん…」

その様子を呆気に取られながら見ていた店主は、はつとして応じる。まさか父娘という可能性があったとは、まるで考えていなかった。

一体いくつの時の子だ、と思わず口を突いて出そうになる。もしくは若く見えるだけで青年はもつと年かさなのか。はたまた何らかの事情で養父として引き取ったのか。

不思議そうに青年と少女は店主を見つめ、童は何が楽しいのかニヤニヤと笑みを浮かべている。

せつかくの客人に余計な詮索をして逃げられてはかなわない、と店主は気持ちを改めて顔を上げた。

「それで、お客人よ。換金して欲しい品ってのは何だい？」

斜に構えた店主の態度には構わず、青年は懐から丸い氷のような、水飴のように透明で光を銀色に反射する薄い『何か』を取り出すと、店主が肘をつく台の上に置いた。

「何だい、こりゃあ？」

店主は手に取って光に透かす。色は川の水面を映したかのような淡い瑠璃で、硝子のように固く繊細な触り心地だった。ちよつと力を入れれば壊れてしまいそうな。

「竜の鱗だ」

あつさりと述べた青年の言葉に、店主は目を剥き手の力が抜けかけたが、どつと冷や汗をかくと共に大慌てで、しかし慎重にその品を持ち直し検分した。

「ほ、本物だ……」

父さまは嘘言わないよー、と少女が不満気に声を上げたが、店主の耳には入らない。

昔、たった一度だけだが、竜の鱗を見た事がある。これはそれと確かに同じものだった。

そう確信を持てる程度には、店主は自身の換金屋としての能力に自信と経験を積んでいた。

何より、光の具合で銀に反射するこの透明な瑠璃色は、竜の鱗で見られないものだ。

「ここに着物はあるか？あるならそれで娘の着物を用意して欲しい。質素な物で良い、残りは路銀に替えてくれ」

素っ気なく告げる青年の言葉に、店主は目に見えて慌てる。

「ちよ、ちよつと待ってくれ！こんな物、とともじやないが俺の手に負えねえ。竜だぞ、お客さん。あんたまさか、竜を退治したとでも

言うのかい？」

こんな酔狂な職業の者やお偉いさん方はともかく、街の人間は『竜』などと言えば伝説上の生き物だと思っっているくらいだ。

それだけ竜は畏怖の対象であり、その鱗となれば希少が過ぎて値を付けられない。

こんな小さな換金屋では、とてもじゃないが対価を用意出来ない。

「退治は……いや、構わん。そういう事にしておいてくれ」

青年は幼女の頭を撫でながら、何やら煮え切らぬ口調で言う。

「はぁん、あんたがねえ…なら尚の事、役所に持って行きな。換金だけじゃねえ、英雄として持て成してくれるさ」

「それは…」

青年は神妙な様子で黙考すると、予想外の言葉を口にした。

「ならば店主、私の代わりにそれを役所とやらに持って行って換金して来てくれ。仲介料はそれから引いてくれれば良い」

その瞬間、店主の頭には良心を押しつけ狡賢い計算が去来した。

幸い、青年は仲介料を指定しなかった。竜鱗の価値を知らずこんな所へそれを持って来た事や所々の発言から察するに、相当の世間知らず。当然、仲介料の相場も知らないはずだ。

ちょっと多めに見積もった所で気付きやしないだろう。これは一世

一代の大儲けの好機では、と期待する。

思えば、女房と一緒にになってから口々に贅沢をさせてやれた事も無かった。女房は出来た女だ。こんな小さな換金屋の女房にしとくには勿体無いくらい出来た女房だ。

どうせ、竜鱗の対価から見れば微々たるもの。女房への恩返しと思えば、少しくらいくすねたって罰は当たらないだろう。

そう思つて店主が、では、と仲介料を口にしたと同時に、肘を突いていた台が大きな音を立てて揺れた。

「その三分」

音の正体は童だった。気付けば青年の隣をすり抜けて、台を思い切り蹴りつけていた。

「どう多めに見積もつても仲介料にやその位が相場だろ、おっさん。世間知らずの二人と違って、おいらは騙されてやらねえぜ？」

なんと、こんな小さな目付役がいたとは。

やはりそう上手くは行かないな、と人並みに自身と世間を知る店主は肩を落としながら悟った。

1 父と娘―1（後書き）

読了ありがとうございます。

一行の中で一番のしっかり者は確実に萩です。

一話分は書きためているので（しかも一年か二年前）、順調に上げていきたいです。

1・父と娘―2

まだ昔とさえ呼べない、鮮やかな記憶の中によく笑う女がいた。
彼は女にこう言った。

『罰が当たった』

女は彼の言葉にこう反論した。

『私の幸せを罰だなんて言わないで』

滅多な事では泣かず、怒らない女の睨む目に彼はたじろぎ、そして

鬼灯は宿屋の窓から夜空にぼっかりと浮かぶ月を見上げていた。秋の夜空ははつきりと大きく満月を浮かび上がらせる。

鬼灯は月が好きだった。

別段、太陽を嫌う訳でも無い。しかし、ふと見上げて落ち着くのはいつも月の方だった。

その気持ちを『好き』と言うのだと、そう指摘されて以来、鬼灯は月を好きになった。

「とうさまっ、とうさまっ！紅葉かわいいっ？お着物きれいな」

紅葉が、頭に被った布が落ちないように押さえながら、くるりと回って新しい着物を自慢する。

臙脂色のその着物は、換金屋の女房が子供の頃に着ていた物を譲ってもらった。くたびれて、普段着用の落ち着いた配色は紅葉の年齢では地味なくらいだったが、それでも彼女が今まで着ていたものよりは随分立派で、本人も気に入ったようである。

鬼灯は黙って紅葉の頭を撫でた。

「えへへっ」

紅葉はその名によく似合う色に頬を染め、嬉しそうにはにかむと、少々遠慮がちだが鬼灯の膝の上に頭を乗せてその身を預ける。

小さく四肢を丸め、しばらくこそそと居心地の良い場所を探っていたが、やがて落ち着いたのか、紅葉は力を抜くとまた満足そうな笑みで鬼灯を見上げた。

鬼灯はやはり、黙って紅葉の頭を撫でる。

「女はそれで良いかもしれねえが、あんまりだんまりじゃ娘っ子には嫌われちまうぜ？主殿」

そんな和やかな空気を割って裂くように、妙に大人びた物言いをす

る童、萩はそう茶々を入れた。

ここは、宿を探している、という鬼灯の言葉に換金屋の店主が貸し出した店の三階だった。換金屋の上の階では、店主の女房が宿屋を営んでいるそうだ。

当然、この部屋にはにやにやと笑う萩もいる。

「えーっ、紅葉とうさますきだよっ？きらいになんないよ？」

「それはあんたが出来た娘っ子なのさ」

「できた？それっていい子？紅葉いい子？」

期待を込めて見上げる紅葉の目を隠すように、鬼灯はまた黙って頭を撫でた。

機嫌が良いのは結構だと思うが、紅葉はそろそろ寝入らないと明日が辛いだろう。

すると、そんな彼の意を察したのか、それとも手のひらによって作られた暗さに眠気を誘われたか、紅葉はすぐにウトウトとし始めた。

頭の布が寝苦しいだろう、と鬼灯がそれを取ってやろうとすれば、紅葉は布の端をキュッと握ってそれを拒否した。

「お姫さん、寝苦しかろう。主殿が布を預かってやろうとな」

「んー」

萩の出した助け舟に紅葉は小さく唸って、眠そうな目を擦るとおず

おずと不安げに大きな瞳で鬼灯を見上げた。

「とうさま、布とっても紅葉のこと、きらいにならない？」

鬼灯はその言葉に一瞬喉を詰ませたが、紅葉の頭を撫で、言い切った。

「ならん」

「萩も？」

紅葉の言葉に、萩は虚を突かれたように目を丸くしたが、すぐにまた子供らしからぬ笑みを浮かべた。

「生憎童女の容姿についてとやかく言うような趣味は無いさ」

自身も童子の身でありながら、萩は飄々と言う。

それに紅葉はようやく安心したように頬を緩め、穏やかな寝息と共に布を握る手を緩めた。

鬼灯は紅葉の頭から布を取り払うとその髪へ指を滑らし、昼間の元気の良さで乱れた髪を手櫛でといた。

「萩」

「へいへい」

短く名を呼ぶと萩はいい加減な返事をして立ち上がり、襖の中から布団を引っ張り出す。

野宿ばかりの旅路だったので、幼い紅葉の事を思えば、布団の存在

が有り難かった。

そう思っていたのに、何故か萩は掛け布団だけを取り出して、それを鬼灯の膝の上で眠ったままの紅葉に掛ける。

「ん？ああ、お姫さんがどうも手を離すようには見えなかったんでね」

怪訝に思う鬼灯の視線に気付いたのか、萩があっさりと言う。
言われて気付いたが、紅葉は頭に被っていた布の代わりに強く鬼灯の着物を掴んでいた。

それを見て、鬼灯はまた紅葉の頭を撫でる。

鬼灯はそうする以外、紅葉への触れ方を知らない。

1 父と娘―2 (後書き)

読了ありがとうございます。

1 父と娘―3 (前書き)

お気に入り登録ありがとうございます！
狂喜乱舞させていただきました。

1・父と娘―3

朝一番で、と指定したとおり、換金屋は昼前には大きな巾着を三つ程抱えて宿まで持って来てくれた。

それと共に、十枚程の紙を渡される。

「ん？ああ、小切手さ。どうもあんたはよく分かって無いようだが、竜の鱗の対価は莫大なんだ。とても持ち歩けるような量じゃない。その小切手で入り用の時に換金しな」

店の前で怪訝な目で店主を見る鬼灯に、彼はそう説明をした。

「全く、これを持ち寄ったのは誰だ誰だ、と根掘り葉掘り聞かれるのを何とかかわしてきたんだ。精々感謝してくれ」

「ああ、すまない。助かった」

ぶつきらぼくに、あるいは申し訳無さそうに、どちらとも取れる様子で鬼灯はそれらを受け取った。

「良かったなあ、姫さんよ。これからは温かいおまんまにありつける」

「う、うー。紅葉は紅葉だもんー」

換金屋の店主から隠れるように鬼灯の腰に引っ付いた紅葉は、萩の言葉に頬を膨らませる。

紅葉は澆刺とした子なので分かりにくいが、こう見えて人見知りの気が強い。

「ところで、あんたらこれからどこへ行こうと言っただね」

「……………」

「そう睨むな。別に詮索しようなんざ思っちゃいないさ。竜を退治した英雄殿の旅路への、些細な好奇心だ」

鬼灯は店主の意図を探るように見返したが、やがて紅葉の頭を撫でながら静かに答えた。

「東の果てにあるという溪谷まで」

それに店主は目を剥いた。

「何だつて！？あそこはよりによって竜を祀っているような、邪教の徒の集落だろう！あんた、そんなところで一体何をしようってんだ！？」

鬼灯は半ば予想していた店主の言葉を受け入れる。

竜に対する人の感情は国によって様々で、ここ周辺の街では伝説級の畏れの対象だが、遠く東の彼方では神に仕える聖獣とされるらしい。

「それは詮索に類する質問だ」

暗に答える気は無いと冷たく示す鬼灯に店主は息をのみ、そしてすくなく溜息をついた。

「まあ、あんたは竜を倒せるようなお人だ。俺なんかが心配する必要も無いんだろっな」

どこか呆れたような店主の声よりも惹かれる何かがあったのか、急に紅葉がせわしなく鬼灯の着物を引いた。

その視線は華やかな街の中心部へ向けられている

「とうさま、とうさまっ。あれなあに？すっごくみんな、たのしそっね」

紅葉と同じく人集りを不思議そうに見る鬼灯に代わり、店主がその疑問に答えた。

「ああ、今はちょうど豊穰祭の時期なんだ」

「ほうじょうさい？」

人見知りより好奇心が勝ったのか、紅葉は臆せず聞き返す。

「簡単に言えば、今冬もおまんまにありつけますように、ってお祈りする祭りだ。ちょうど良い、客人よ。娘っ子を連れて行ってやんな。大道芸はもちろん、色んな国の行商が集まって珍しくて綺麗な品も沢山ある。まあ、竜鱗にかなう物は無かるうがな」

そう締めくくると、店主は冗談めかして笑い声を上げる。

その言葉に紅葉は大きな瞳を爛々と輝かせて好奇心を示したが、それを言い出せないのか体をうずうずと揺らし、ただ落ち着きなく祭りの方と鬼灯の顔を交互に見上げる。

そんな彼女に助け舟を出したのは萩だった。

「お姫さんよ、黙ってちゃ何にも分かりやしねえぜ？行きたい所があるならちゃんと言ってみるんだね」

「…………と、とうさまっ！とうさま、紅葉いつてみたいいの、きらい？」

萩の言葉に後押しされ、紅葉は全身をばたつかせながらそう問い掛ける。彼女は小さな体躯を全て使って、行ってみたくてたまらないと訴えていた。

鬼灯はしばし考えるような素振りを見せたが、やがてその視線を紅葉へゆつくりと向けた。

「私か萩から、離れすぎないなら」

あまりに言葉少ない鬼灯の言葉に、しかし紅葉は正確に許可する意向を汲み取って歓声を上げた。

「ひゃあっ！鬼灯とうさま、はやくはやくっ」

逸る気持ちを抑えきれないのか、紅葉は鬼灯の着物をぎゅっと引張って急かす。萩はやれやれ、とひどく大人びた動作で肩をすくめた。

1 父と娘―3 (後書き)

読了ありがとうございます。

一話が短く、小刻みな更新ですみませんが、おそらくこの後もこの量です。ご了承ください。

1・父と娘―4

紅葉は、煌びやかな街の風景に目を奪われていた。

街には色んな出店があつた。甘そうな香りがするもの、辛そうな香りがするもの。そこには何でも揃っていた。紅葉の知らない物も、それは沢山。

紅葉には未だ見たことがない、世界中の全てがこの街に集まって凝縮されているようにさえ感じた。
紅葉が以前に住んでいた村とは違い、この街は本当に人と物で溢れかえっていたから。

男の人の笑い方は豪胆で、女の人々は皆華やかで綺麗だ。量もそうだが、村と特に違うのは活気だと紅葉は思う。

紅葉は怯えた村人の表情しか知らなかった。

萩が言うには、こんなのは世間のほんの一端で、世界はもっと途方もなく広いそうだけど。

紅葉は萩が好きだった。

紅葉の知らない色んな事を、何でも沢山知っていて、尋ねればそれを教えてくれる。

たまに教えてくれない事もあつたけれど、それは自分は知らない方

が良い事なのだろう、と紅葉自身何となくだが悟っていた。
だから紅葉は、深く追求しようとは思わない。

教えてくれなくても、萩が紅葉に対して笑ってくれるから大好きだった。

少しだけ、紅葉の名前を呼んでくれないのは寂しいけれど、大事な名前を呼んでくれないのは彼女のささやかで唯一の不満だったけれど。

先走り気味の紅葉は二人を振り返る。

自分の居場所はどこだよ、と示す為に両手を振れば、萩は片手を上げてくれる。

それだけに意味があった。

手は振り返してくれないけれど、こちらからじっと目を逸らさないでくれる鬼灯をきよんとしばらく見つめて、また前を向いて駆け出す。

胸が一杯でまともに鬼灯の顔を見られない。

頬が真っ赤に染まっていると、自分でも分かる程上気している。いっぱいいっぱいの気持ちをどう表現したら良いか分からなくて、ひたすら前へ進む。

鬼灯が櫛を買ってくれた。

萩が言うにはそんなに高価なものでは無いそうだけど、木彫りで赤い花をあしらったそれはとても可愛いと思うし、何より『とうさま』が買ってくれたのだ。それを宝物以外の何と言うのか。昨日の着物も、名前もそう。

幸せ過ぎてどうになっちゃってしまいそう。

櫛を胸にぎゅっと抱き締める。

鬼灯と改めて出逢ってから、紅葉には幸せばかりがそばにあった。大きな手が頭を撫でるのが好きだった。その手の温もりはもっと好き。紅葉を見るその目が好きだし、紅葉に話し掛ける声が好き。だって彼は優しい。今まで出逢った誰よりも優しい。それに何より彼は――

紅葉の『とうさま』だ。

ずっとずっと焦がれていた紅葉のとうさま。

会いたくて会いたくて、あんまり恋しくてその気持ちさえ忘れてしまっ程、ただただ恋しくて。そうしてようやく出会えた父親で、初めての家族。

家族は人間の証のように、紅葉は思う。

もしも鬼灯に嫌われてしまったら、と思うと紅葉は恐ろしくて仕方がない。

それなのに、鬼灯を困らせたくなんて無いのに、紅葉の胸には度々願いが灯るようになった。

だけどやっぱりそれを口に出さなくて、紅葉は自分を誤魔化す為に

駆ける。

小さな背で人の合間を縫うように歩く紅葉はつたなくて、簡単に人の波に押されてしまう。

その拍子に櫛を取り落としそうになり、紅葉は慌てて手を伸ばす。だってあれは、鬼灯が買ってくれた、大事な大事な紅葉の宝物なのだ。

思わず、いつも被っている布を押さえる手を離してしまった事を後悔したのは、櫛を何とか取り落とさずに済んだ一瞬後だった。

1 父と娘―4 (後書き)

読んでいただいております。
次話以降の反応が怖いです…

1 父と娘―5（前書き）

少々、罵声（？）が飛び交います。

不快になれる可能性があるので、ご注意ください。

1 父と娘―5

彼は、特別子供など欲しいと思った事はなかった。

ただ、女が幸せそうに笑ったから。

ただ、幸せだと女が笑ったから。

『そばにいてね』

彼は女の笑顔に幸せを感じたから、ただ無言で頷いたのだった。

はらりと舞った布が落ち、紅葉の顔が露わになった。

首もとから右頬にかけて、彼女の肌は人のそれでは無かった。

その色は川の水面を映したかのような淡い瑠璃で、硝子のように固そうに見える。光を反射すれば、それは銀色にも見えた。

瑠璃色の肌にはいくつものヒビが入っていた。否、鬼灯はそれがヒビではないと知っている。紅葉の手のひら程の大きさの硝子に見えるそれが、幾重にもかさなっているからそう見えるのだ。

それはそう、まるで何かの鱗のように。

紅葉の左目とは違う、その肌のせいでぎょろりと大きく見開いた蒼い瞳と目が合った瞬間、鬼灯は考えるよりも先に紅葉と被っていた布を引っ付かんで抱き上げた。

しかし、この人混みの中だ。

素早く紅葉の顔を隠した所で、その一瞬間の間でさえ目撃されてしまった。

いくつかの悲鳴が上がる。

せめて他の者に状況が伝わる前に、と萩へ目配せする間も惜しく駆け出した。

走り去る背中から、悲鳴と罵倒が聞こえる。

「いやあああああ！化け物！化け物よ！！」

「な、何しに来やがった化け物が！」

「どっちだ！？化け物はどっちへ行った！？」

「恐ろしい顔をした化け物がっ……」

悲鳴は一瞬にして伝播する。

幸い、進む先の人垣はまだ何が起きたのか理解出来ていないようで、戸惑いながら道を開けて行く。怒声に追いつてられながら、紅葉を落とさぬように抱え直す。頭に拾った布を押し付ければ、彼女は自らそれを被り直した。

「鬼灯、東だ！東の山に入れ！人間はそこまでは追えない！」

萩が、普段の『主殿』と呼ぶ戯れを止めてそう叫ぶ。鬼灯はその言葉に従って土を蹴った。

萩は鬼灯らとそれを追う人間達の間を踊り出ると、小さな体を器用に捻って先頭の男の刀を持つ手を蹴りつけた。男は刀を落とす。それと同じ要領で、萩は追っ手の合間を縫って刃物を持つ者を優先して打撃を与える。

当然、激昂した者が萩を捕らえようとしたが、彼はすばしっこく何より小回りの利く小さな体は人の手をするりと抜けてしまう。

手首や足を蹴られた者が彼を振り返っても、萩は気付けば全く違う所にいる。

しかし運悪く、萩は一人の男を見逃してしまった。紅葉の顔を直に見たのか、男はその表情を恐怖に染めて興奮している。

鬼灯はようやく状況を呑み込めて来た人垣に阻まれて上手く前へ進めない。

男が追い付く。刀を振り上げる。

慌てて萩が身を翻しても、もう遅い。

鬼灯は唇を噛み締めて、紅葉の顔を一目に晒さない為に自身の胸に押し付けて、振り返る。

一瞬後、金属同士が触れ合う耳障りな音がした。

「りゅつ、竜だ…」

そう怯えを含んだ聞き覚えのある声が、耳に届いた。

鬼灯は右手に紅葉を抱え、左手で振り下ろされる刀を受け止めた。本来なら、その刀は鬼灯の左手ごと二人を切り裂いた。けれど、振り下ろした刀の方が鬼灯の腕に触れた瞬間に砕け散ったのだ。

剣を受け止めて切れた着物の隙間から見える鬼灯の腕は、川の水面のような瑠璃色をしていた。それは、紅葉の右頬と同じように。それよりもまだ、びっしりと隙間無く重なった鱗。

その時上がった悲鳴は、紅葉の時の比では無かった。

紅葉の時はまだ、異様な面立ちの幼女、と思うだけで売り飛ばそうと、『化け物』をお上に突き出す事で英雄願望を満たそうとする者もいたかもしれない。

しかし、今度の悲鳴は純粹な恐怖心だけがあつた。誰もかれもが我先にと人を押しのけ、必死に鬼灯らから逃げて行く。

それは『竜』という明確な恐れの対象の名を上げられたからだろう。竜のそばに立つ事は、燃え盛る炎の中にとどまる事より恐ろしい。

鬼灯は始めに竜、と呟いた方へ目を向ける。そこには換金屋の店主がいた。

店主は腰を抜かしているようで逃げる事も叶わず、鬼灯と目が合えばガタガタと震えた。

竜の鱗は何よりも堅い。普通の刀では傷一つ付けられない。そんな

風に全ての刃を砕くなんて、竜鱗にしか出来る事ではない。

竜はそういう化け物だ。人間による脆弱な攻撃など全て弾き、気紛れに爪を一閃するだけで全てを破壊する。

そして、人間に擬態したそんな竜の化け物が、鬼灯だった。

今の左手は、そこだけ本来の姿へ戻した為。

一振りするだけでその腕はまた、人の形を模した。

「ばっ、化け物めっ……」

変化する様を目の当たりにした換金屋は、震えて噛み合わない歯の隙間からそう呟く。

鬼灯はその言葉に震えた紅葉の頭を撫でながら、店主を一瞥する。

「世話を掛けてすまなかった」

一言そう告げて、鬼灯はまた東の山を目指す。
すぐに萩が後ろへ追い付いた。

「兵でも出されりや厄介だ。急ぐぞ、主殿」

いつもより少しは真面目な萩の言葉に、前を向く鬼灯は何も答えずに足を進めた。

1 父と娘―5（後書き）

私、キャラや設定の焼き増しをよくするのですが、この話には他の投稿作と被る所はないと思っていたら、被る人を見付けてしまいました…設定が。

そんな曖昧さでいってますのに、読んでいただいてありがとうございます！

あと、二話で『1』が終わるので、明日には上げたいと思っています。

『1』と銘打ちつつも、1だけで終わっても満足な気がします。

1 父と娘―6

孤独な竜がいた。

気付くと深い山の中にいて、周囲には獣の息遣い一つ聞こえない。ただ、彼のいる場所だけがぽっかりと空いた穴のように月明かりに照らされていた。

山の頂にいながら彼は他の動物に会う事もなく、ただ何をすれば良いかも分からず、その場に座り続けた。

ある日、人間がその場に顔を出した。人間は彼を見るなり大慌てで逃げ出したが、彼は始めて声を聞いた人間に惹かれ、話をしてみたくなった。

孤独を埋めたかったのだろう。

この姿が恐ろしいのか、と初めて見た人間を真似て人間の姿に成ってみたりもしたが、慣れぬ内は何とも不完全な擬態で、やはりその姿を見た人間は悲鳴を上げて逃げ惑った。

それでも彼はやはり、人間に焦がれた。
まるで鳥の雛が、始めて目にしたものを親と慕うように。

しかし、彼の願いは虚しく、人間は日照りが続けば彼に生贄を捧げるようになった。その時になってようやく、彼は自身と人間が相容れないものだと気付いたのだ。

女は三人目の生贄だった。

女はそれまでの人間のどれとも違い、怯えていないはずがないのに、震える声で彼に笑いかけた。

『讓葉と言います。私を——食べてください』

ようやく人に焦がれる事を諦められた彼は、初めて自身へ笑いかけた女へどう反応すれば良いか、分からなかった。

夜の山の中腹まで駆け上がって、鬼灯はようやく走っていた足を緩めた。

ここまでくれば、獣を恐れて人間は追って来られない。その獣は、本能で鬼灯の身の内の恐ろしさを悟るから、彼らにはけして近寄らない。

だから、山は彼らにとって、昔から安全な所だった。

「一休みしようじゃないか、主殿。お姫さんも今日はお疲れだろう」
萩はまるで街での騒ぎなど無かったかのように、いつも通り気安く

笑う。

鬼灯は無言でそれに従う事を決め、抱えていた紅葉を地に下ろす。その途端、紅葉が小さな体を全力で揺すって慌て始めた。

「ないっ！ない！ない！？」

「……………どうした」

「くっ、くしが、とうさまのかつてくれた、紅葉の櫛がないの！」

ああなんだそんな事、と鬼灯は少々安堵する。あの騒ぎの中では落としてしまっても何ら不思議ではない。

しかし、紅葉にとってはさっきの騒ぎよりも一大事のように、くしやりと歪められた顔の瞳には大粒の涙が溜まっていった。

「櫛なんざまた買ってもらえば良いじゃないか。何せ主殿は今、ちよつとした小金持ちだ」

「ダメ！！」

いつもの茶化すような萩の言葉に、紅葉は語気を荒くして遮った。泣いても良いような場面でさえ、キョトンと首を傾げるような彼女には珍しい。

「もっ、紅葉の櫛はあれだけなのっ。とうさまがくれた紅葉のはあれだけなの、あれ以外はちがうの！同じのもちがうのっ。あれ以外はいらないもん！紅葉のはあれだけだったのに…」

そこまで言って、紅葉はとうとう声を上げて泣き出した。

まるで何も繕うものがない、子供らしい泣き方。

しかし、鬼灯はそんな紅葉にどう触れれば良いか分からない。

そもそも彼女に、何をそんなに悲しむ必要があるのかさえ分からない。

戸惑っていれば、隣から萩が僅かに面倒そうにしてこう言った。

「泣き止まないか、お姫さん。泣き止んだら主殿が何でも一つだけお願いを聞いてやろうとな」

それは随分勝手な言い分だったが、それで泣き止んでくれるなら、と鬼灯も反論はせずに紅葉へ目をやった。

すると、彼女はひくつと一度喉を鳴らし、未だ涙を溢れさせる瞳をキョトンと大きく見開いた。

「ほ、ほんと！？とうさまそれほんと！？」

途端に紅葉は瞳を輝かせて鬼灯に目を向ける。現金だな、と思いながらも鬼灯は頷く。

その時ふ、と鬼灯は紅葉の母を思い出した。

竜鱗を右半身だけとはいえ自身から受け継いだものの、紅葉の顔立ちが母によく似ていた。

けれど、やはり『同じ』ではない。

母親も明るく朗らかな性格だったが、紅葉の無邪気な笑顔とは違いやはり大人びた、悪戯っぽい笑い方が多かった。

泣く時は、はらはらと静かに涙を流した。何かを悔いるように。

紅葉を見れば見る度に思う。

やはり、彼女と紅葉は親子で、しかし違う人間なのだと。

泣き止んだばかりで、頬を赤く染めたまま、紅葉は意を決したように口を開いた。

1 父と娘―6 (後書き)

次で一話終了です。

1・父と娘―7

彼はただ、女のそばにいられば良かった。

それだけが幸福と、まるで童子のように真つ直ぐと迷い無い心で信じていた。

自身の血を継いでいようがまいが、新しく生まれて来る命の尊さなど分からなかった。人に焦がれてはいても、彼は家族という温もりを知らなかったから。

彼が大切なのは結局の所、女だけだったのだ。生まれて来る赤子はどれだけ女に似ようとも、女本人ではない。

彼は女を大切に想うあまり、結果として女と赤子の関係性を明確に否定していた。

それなのに、

紅葉は恥じらうように視線を足元へさ迷わせて、普段より幾分小さ

な声でこう言った。

「えっとね、えっとね。とうさま、紅葉のことぎゅってしてくれる？歩くときはおてて、つないでほしいの」

窺うように紅葉は鬼灯を見上げている。

けれど、鬼灯には分かってしまう。その瞳の奥は拒絶される事に怯えている。

「お姫さん、それじゃあ二つじゃないか」

からかう萩の声が聞こえる。

鬼灯はそれに反応せず、紅葉の前に両膝をついて彼女と目を合わせた。

「あ、あつ！そうね、じゃあね、とうさま、んっとね…」

「良い」

鬼灯は紅葉の言葉を遮って、勢い任せに抱き締めた。小さな紅葉が鬼灯の胸で顔を打ったのが分かる。それでもそのまま抱き締めた。

彼は——鬼灯は子供なんてどうでも良かった。ただ、女が笑ってさえくれるなら良かった。その為なら何だって出来た。女が笑顔のまま子を産み育てられるように、人間のフリをして何ヶ月も村で働いた事もあった。

紅葉がおずおずと鬼灯の背中に小さな腕を伸ばす。鬼灯が身動きしないのを感じ取って、紅葉はととてもとても幸せそうに笑って彼の首へ顔を埋めた。

「えへへっ。とうさま、大好き」

それがどうしてこんな、愛おしくなってしまったのだろう。
紅葉が産まれてから、鬼灯は後悔ばかりだった。

その頬を埋め尽くす鱗に、その鱗を見て産まれたばかりの赤子を恐れる産婆に、化け物と呼ばれる度に。
産むべきじゃなかったと思った。

いくら女が望んでも、女が幸せでも、自分の血を引く為に、産まれた瞬間から化け物と恐れ、蔑まれる事の分かりきったこの子どもを産ませるべきじゃなかった、とそう思う。

あんまりに可哀想だ。

子どもは悪くない。化け物が人間のフリをしようとした為に、巻き込まれたただけだ。

それでも、それでも――

産まれなければ良かった、なんてちっとも思えない。

初めて産まれたばかりのこの子どもを抱いた時、自然と涙が流れた。
何に對してかは分からない。女に對してか、それとも未だよく分からない神と呼ばれる何かに對してか。

鬼灯は感謝した。

その赤子に出逢わせてくれた全てに、深く深く感謝した。

紅葉は女——譲葉ではない。
分かっている。だから、彼は産まれてくる命に興味が無かった。
自分でも理由が分からない。

「すまない、紅葉」

こんなにもこの子が愛しい理由。
無邪気に紅葉が自分と呼ぶ度、笑いかける度、膝の上で眠る姿を見る度、言いようのない愛しさが湧いてくる。
譲葉のときとは違う、しかし決して比べられないものが。

自分の存在が、血が紅葉を苦しめるのに。彼女に『父』と呼ばれる資格なんて無いのに。彼女に笑顔を向けられる資格なんて無いのに。

けれど今更、愛しくて。

どうしようもなく愛しくて。

この子の成長を誰より近くで見届けたい。

鬼灯からの突然の謝罪の言葉に、紅葉は戸惑って体を揺する。

「ど、どうしたの、とうさま？とうさまがあやまることなんてないのよ。だって紅葉、もう櫛いらないよ。とうさまがぎゅってしてくれるなら、紅葉は櫛なんていらないのよ」

拙い紅葉の言葉に、鬼灯はようやく悟る。

一番に感謝すべきは他の誰でもない。無邪気に慕ってくれるこの愛し子だ。

「ありがとう。私の子に、産まれてくれて」

その鱗は苦難と哀しみしか運ばないけれど、いつかその血を恨む日が来るかもしれないけれど、今この時ばかりは感謝だけを送ろうと思う。

例えどれだけ苦難を強いても、例えどれだけ憎まれたとしても、仮に時が戻ろうと、鬼灯は何度でもこの愛し子を腕に抱く事を願うから。

「ひゃあっ」

紅葉はととてもとても嬉しそうに歓声を上げ、強く強く鬼灯に抱き付いた。

1 父と娘―7（後書き）

鬼灯 ほおつき

本体は竜。譲葉と出会い、人として村で暮らすようになるが、紅葉が生まれた事で正体がバレ、二人を村に置いてもらう事を条件に一人山に戻った。人々の恐れる心から、竜神として祀られていた。

紅葉 もみじ

鬼灯と譲葉の娘。譲葉亡き後、理由も分からないまま、竜神の化身として村の社に祀られていた。向けられる感情が恐怖と嫌悪である事を察し、村人には近寄れず、少ない供物を食べて孤独に生きていた。

萩 はぎ

戯れのように鬼灯を主と呼ぶ。鬼灯が一人山に戻ったときに出会い、紅葉と鬼灯を再び引き合わせる事に一役どころか五役くらい買った。

譲葉 ゆずりは

鬼灯の妻で紅葉の母。族長の娘で、生まれたときから生贄に捧げられる事が決まっており、その分村中から可愛がられて育った。

こんな所まで読んでいただいて本当にありがとうございます！
次は旅の続きか、鬼灯と譲葉の話、もしくは鬼灯と紅葉と譲葉の話。

基本的に一話完結なので、どれから進めても良いなあ、と考え、ちよっと悩み中です。

2・竜と生贄―1（前書き）

ほおつき ゆずりは
鬼灯と譲葉の話。

携帯投稿だと振り仮名の付け方が分からないので、前書きで名前紹介をしています。

1・父と娘よりも過去の話です。

2・竜と生贄―1

その頃、鬼灯はまだ鬼灯では無かった。名もない竜だった。

『讓葉と言います。私を――食べてください』

彼女は三番目の女だった。

二番目から五十年余りで現れた、三人目の生贄だった。

今度は何を祈願する贄だろう、とのんびり考えたのを覚えている。
彼は行儀良く正座する十五ほどの女を見て憐れんだ。

まだ年若い女が、こんな意味の無い贄として連れて来られた。そう、
意味が無い。

竜は、彼は、人を食べない。

『いらん。帰れ』

その頃まだ、人に上手く擬態出来なかった彼は竜の姿で女を見下ろ
してそう告げた。

竜としての体は大きく、女をより小さく見せていた。

しかし、その女は一人目とも二人目とも違い、決意の籠もった眼差しで彼を見返した。

その瞳には確かな怯えが浮かんでいたのに、女は頑なだった。

『私に帰る場所などありません。私は、村の為に贅となる事が、私の使命なのです』

一人目は崖から落ちて死んだ。無理矢理連れて来られた生贄は、竜のその姿に恐れをなし、飛び上がるように逃げ出そうとして足を滑らせ崖から落ちた。

二人目は彼の前に現れた時点ですでに死んでいた。生贄としてその命を捧げる儀式とやらを済ませた結果らしく、数名の男達がその死体を置いて逃げて行った。

彼はそのどちらも憐れんだ。

生贄など選ばれた女は、皆不要に命を捨てる事になる。

だからいらないと、帰れば良いと、それを他の村人にも伝えてくれと、彼は突き放した、のに。

女は頑なだった。

座したまま動こうとしなかった。

食事すら取る様子もなく、女は生贄として餓死でもするつもりだろうか。

それはあまりに残酷な結果だった。憐れだった。

だから、彼は眠気には勝てなかった女が眠ったのを確認し、不完全な擬態の人の姿で山を少し下った。

山は彼の庭と言って差し支え無かった。

人の好む木の実や魚を集めて眠る女の近くにまとめて置いておいた。

目覚めた女がこれは貴方が？と驚きを示したが、彼は答えなかった。

そんな事を数日続けて、女は小さく呟いた。

『貴方は優しい方ですね。どうして貴方が、恐ろしい竜なのでしょう』

それは、彼がいつも思っている事だった。

2・竜と生贄―1（後書き）

読んでいただいております。

譲葉は、本当は一字の方の漢字にしたかったのですが、私の携帯では出ません…。

二章は五話で終了予定です。

2・竜と生贄―2

帰れ、と言う彼に女は身の上を語った。

『私が贄になる事は、生まれたときから決まっていた。その代わりに私は大切に、村中の方達から本当に大切にしていた。きました。今が、そのご恩に報いるときなのです』

人など食さん、とすげなく断る彼に、女は頭を下げた。

『どうか、私をお食べ下さい。それだけが唯一、私に出来る――』

女の肩は、震えていた。

彼は女が寝静まってから食料を探した。

彼自身、戯れに木の実を食す事はあっても食欲というものはなく、人間の女の一食分がどの程度かが全く分からず、毎日のように苦心していた。

その時は決まって人の形を取っていた。竜の図体では大き過ぎて、木々を倒して大惨事になってしまふからだ。

と言っても、慣れない人の姿は実に不完全で、四肢を人間に似せた所で体中から突き出す鱗が余計に化け物染みており、何度か人間と出会ってしまう度に悲鳴を上げて逃げられたが。

だから、彼は女が寝静まってから食料を探す。

満月の夜だった。

川の水面に大きな月が映り込んでいて、彼はそれを覗き込んだ。月と共に水面に映った自身は、やはり人間には程遠かった。

月を映すこの美しい川の水で身を清めればこの鱗も落ちるのではないか、と夢想した。

背後で枯れ草を踏みしめる音がして、反射的に振り返った事をすぐに後悔した。

女がいた。女は目が合った瞬間、恐怖に目を見開いて声にならない悲鳴を上げ、腰を抜かした。

彼もその突然の状況に頭が付いて行かず、妙な焦燥感に駆られた。見られてしまった。女に、恐ろしいだろうこの姿を。『竜』とはまた違うこの姿が不気味であると、彼は理解していた。

思わずその場から逃げ出そうとして、しかし、何故か女に呼び止め

られた。

女の声は震えていた。顔は青ざめていたし、奥歯が噛み合わずガチガチと音が聞こえた。

それでも、女は彼を呼び止めた。

『ちが、違うの！これは、驚いただけで、こ、怖いのではないのよ、だから、あの、』

女は明らかに動揺していたし、怯えていた。

それでも待つて、と呼び止めた。震える声で呼び止めた。

『あ、あなた、竜神さまよね？あ、あの、私、もしかして貴方にとっても酷い事を言ってるんじゃないかって、あの、そう思って、今夜、人影が歩いて行くの、分かって…』

女は何かを堪えるように両頬へ爪を立て、髪をぐしゃりと掴む。恐怖からか、呼吸を荒げて女は言った。

『あ、貴方は私を食べてくださなくて、むしろ食べる物をくださって、それはあの、生かそうとしてくれる、のですよね？それは優しさで、優しくしてくれるのは——』

女は怯えに染まった瞳で、しかし確かに真っ直ぐに彼を見詰め、

『貴方は、人間との共存を望まれているのですか？』

言った。

女はすぐに慌てて、己の言葉を補足した。

『い、いいえ、いいえあの、私の愚かな勘違いならごめんなさい。けれど貴方は、そうして人の姿をなさって、だから、もし、人の姿をなさるのも人に近付きたいから、人と歩みよりたいから、もし、そんな理由なら、あの、『私を食べて』と言った私は、なんて残酷なのだろう、とそんな風に、かんが——』

忙しなく頭を動かして、一度俯いて顔を上げたとき、女は不思議なくらい唐突に言葉を失った。

大きな瞳をきょとんと見開いて、恐怖心さえ取り払ってしまったような驚きを示していた。

『……………泣いて、いるのですか？』

言われて初めて、彼は涙を流す自分に気付いた。

山を越える人間を何人も見送った。彼には不思議と人間の操る言葉が分かり、明るいその声に惹かれた。

けれど人は彼を恐れた。竜の姿に畏怖し、人に似せた姿を化け物と逃げ惑った。

仕方がないと思った。

種族が違うのだから仕方がないのだ、と彼は受け入れた。

けれど、そこには彼以外に竜という種は存在しなかった。

鱗まみれの濡れた頬に触れたその手の温もりを、彼は一生忘れないだろう。

女は練習をしようと言った。

出来る限り人の姿を取れるように練習をしようと、人の形をしながら鱗に侵された異形を真正面から見て笑顔で言った。

おまえは恐ろしくないのか、と彼は問うた。

女は軽やかにこう笑った。

『涙を流す』『人』の何が恐ろしいと言うの』

救われた気分、だった。

2・竜と生贄―2（後書き）

読んでいただいております。

これは書きためてるので、一話ずつくらいであげていきます。

2・竜と生贄―3（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！
今後とも頑張りますので、よろしくお願い致します。

2・竜と生贄―3

人に成りたかった。

それは人という種への憧れではなく、ただ言葉を、感情を交わす相手が恋しかったからで。それが可能だったのは人間だけだったから、ただそれだけで。

だから彼は、女が自身を『人』と言ってくれたあのとき、もう自身が何者でも化け物でも人間に成りきれずとも良い、とそう思えた。

初めて諦めではない感情で、自分自身を受け入れられた。

女は『竜神さま』と彼を呼んでいた。彼は神などではないと主張した。

女は、では名を教えて欲しい、と言った。彼は困った。彼に名など無かった。必要になった事さえ、これが初めてだった。すると、女はこう言った。

『じゃあ、私はこれから貴方の事を鬼灯と呼ぶわ。知っている？ 茜色の実がとっても可愛くて、大好きな植物なの。貴方もきつと気に

入るわ』

笑顔で女が言つて、彼はその日から鬼灯となつた。けして手に入らなかつたものを、女と出会つて次々に手に入れた。

『譲葉』が全てをくれた。

譲葉が川の水面の代わりに鬼灯をその瞳に写し、鬼灯は少しずつ人の姿を取る事も上達していった。

譲葉が山へ現れたのは冬の寒さの残る初春の頃。季節は秋まで瞬く間に巡つていった。その頃になると鬼灯は、もう人間として何の不自然もない姿を取れるようになっていた。

夏の暑い日は木陰で涼をとり、雨の日は洞窟の中で身を寄せ合つた。

穏やかな日々だった。

鬼灯にとって、初めての温かな日々だった。

そう、幸せだったのだ。

お互いの立場を、忘れるくらいには。

秋も深まった頃、譲葉は夢に魘されていた。ごめんなさい、と眠ったまま涙を流していた。

鬼灯は驚いて彼女を起こし、何かあったのか、と問うた。譲葉は大丈夫、と笑ったが、目を逸らさない鬼灯に、更に涙を流してすがりついた。

『私、貴方が好きよ。貴方が竜だとか、そんな事どうでも良いくらい、貴方が好きよ。鬼灯の不器用な優しさが、どうしようもなく愛しいの。だけど、ただどね、』

彼女は鼻を噉って、言葉を繋いだ。

譲葉の名の意味を知っている？と瞳を不安に揺らして鬼灯を見上げた。首を横に振る鬼灯に、譲葉は少しだけ笑った。

『譲葉という植物はね、世代交代を象徴しているの。新葉が成長すると古い葉が落ちて譲るから、譲葉。私の役目はそれだったの。生贄になる事によって次の世代を明るいものにする、古い葉が、私』

譲葉はくしゃりと顔を歪めると、鬼灯の胸に顔を埋めた。鬼灯は彼女の言葉に、何も言えない。

彼こそがその生贄を捧げられる対象だったのだから。

自分がいなければ、譲葉も新葉など関係なく自分だけの為に生きられたのだろうか。

『私はこの命を懸けて新葉を守らなければならなかった。けれど、

鬼灯は優しいから、私を生贄とは思わないでしょう？生贄という言葉に悲しむでしょう？私は鬼灯のそんな優しさにつけ込んでいる。私は浅ましく生きて、私は、』

譲葉は絞り出すようにしていった。

『村の未来の為に、兄を犠牲にして生き長らえたのに』

譲葉はゆっくりと、嗚咽混じりに鬼灯へ全てを語った。

2・竜と生贄―3（後書き）

読了ありがとうございます。

予定通り、残り二話で終われそうです。

2・竜と生贄―4

譲葉が語ったのは、懺悔だった。

彼女には兄がいた。

明るく優しい兄がいた。

譲葉は兄が大好きだった。

いつも朗らかに、時折切なそうに自身の頭を撫でる兄が好きだった。

譲葉が十三のとき六つ年上の兄にお願いして、村人に内緒でこっそりと紅葉を見に山へ行き、そこで些細な事で喧嘩をした。

一方的に譲葉が拗ねて、危ないと言われていた方角である事に気付かず駆け出した。

危うく、足を滑らせ崖から落ちる所を兄に助けられた。

そして、兄は死んだ。

譲葉を庇って死んだ。

けれどその事で彼女を責める村人は一人もいなかったという。

両親も、兄を愛していた彼の許嫁も、譲葉を責めなかった。

村の大切な生贄を守ったのだから、と誰もが兄を称えた。それは村を守る事に繋がると、名誉な事だと賞賛した。

哀しみでやつれた許嫁も、そう思う事で何とか心を保っていた。

だから、譲葉は生贄というこの役を立派に果たそうと心に誓った。それまでの漠然とした気持ちではなく、兄の死を無駄にしない為に兄の遺志を継いで、生贄として村を守ろうと決意した。

だけでもうどうしたら良いか分からない、と譲葉は涙を流した。

『誓ったのに、竜である貴方はこんなに優しくて、生贄って言葉に哀しんで、そんな鬼灯を愛してしまった私はもう、私を食べて、なんて酷い強要も出来なくて、それ所か何の意味も無くて。だけでもそれじゃあ、一体兄は何の為に死んだの？どうすれば私は、兄の遺志に報いれるの？』

青ざめて顔を覆う譲葉への触れ方が分からない鬼灯は、大いに戸惑った。

こんな風に涙を流す彼女は初めて見た。自身の姿に怯えた時でさえ、ここまで青くはなっていなかった。

だから、触れ方ではない分かる事を、いつもより饒舌に言った。

『私は譲葉が他の誰かを救うから、そんな理由でそばにいたいと願ったのではない。そんな事が無くても、おまえがおまえである限り、私は譲葉のそばを望むだろう。それはおまえの兄君も同じなのでは

ないか』

村を救う生贄だから、そんな理由ではなく、ただ妹を愛したから守った。それだけの事では無いのかと。報いるべき事などあるのかと、鬼灯は言った。

讓葉はその言葉に大きく目を見開くと、鬼灯が戸惑っている距離を飛び越えて、彼の首へ抱き付いた。

嗚咽まじりの吐息と共に、彼の肩に涙が落ちた。

『私、卑怯な女よ。あなたのそんな優しさに甘えて、自身を許そうとしている。でもね、どうしても、嫌われても仕方ないなんて言えない。どうか私を嫌わないで』

嫌える訳がない、とそう正直に答えると、讓葉はより一層強く抱き付いて泣いた。

泣いて、泣いて、一晩中泣いた。

鬼灯はその間、彼女のそばをけして離れなかった。

2・竜と生贄―4（後書き）

読了ありがとうございます。

次で鬼灯と譲葉の過去編が終わります。

2・竜と生贄―5

讓葉が涙を流したあの日から、二人は一時もそばを離れる事は無かった。

鬼灯は恐る恐る彼女へ手を伸ばし、讓葉は彼を受け入れた。

二人寄り添うように生きるのは、温かった。

冬に讓葉が体調を崩した。

鬼灯は讓葉の村とは反対の、山の麓にある村に助けを請うた。

村人達は親切で、外れにある空き家を貸してくれた。ただの風邪だろう、とどろいう食事が良いかなどの師事もしてくれた。

それをきっかけに、二人は夫婦として村に身を寄せ、人の中で穏やかな日々を過ごした。

鬼灯は男達に混ざって畑を耕し、讓葉は女達と家の仕事をこなした。

優しい村だった。

優しい人達だった。

畑仕事などした事がない鬼灯にも丁寧に教え、女達と話す譲葉は楽しそうに笑っていた。

人は優しい。

二人は幸せだった。

お互いの温もりを手に取り合って、人間のそばで人間として暮らした。

鬼灯は村人を謀って、譲葉と共に人間として生きる幸福を手に入れた。

それから一年と半年。

別れのときは新たな歓びと共にやって来た。娘が生まれたのだ。

娘の肌を覆う鱗から鬼灯の正体が露見し、村人達は畏怖してその存在を拒絶した。村を追われた彼は、彼女達だけでも村に置いてもらえるよう村人達に懇願し、譲葉のそばから去って行った。生まれたばかりの幼い子どもと彼女を残して、一人受け入れ、山へと戻った。

鬼灯は、二人の為ならば、今度こそ永遠の孤独に見舞われても、構わなかった。

後悔は無い、はずだった。

彼女は元々人間で、子どもは彼女といられれば幸せになれる。自身がそうであつたように。

これで良いのだ、これが正しいのだと自身に言い聞かせていた。人間は人里で暮らし、竜という獣は山で暮らす事が相応しいのだから。

「鬼灯とうさま、どうしたの？」

そろそろ冷たくなってきたはずの川の水を跳ねさせ、元気にはしゃいでいた紅葉が、過去に耽っていた鬼灯の顔をキョトンと覗き込む。その顔が記憶の中の彼女と重なった。

『鬼灯、どうかしたの？』

後悔など——しない訳がない。

自身の身勝手に孤独を選び、結果として鬼灯は、その為に紅葉と紅葉にも孤独を強いたのだ。自身よりも余程過酷なそれを。その事に、鬼灯は紅葉と再会して初めて気付いた。

鬼灯は、立ち上がって荷物を抱え直す。

「もういくの？とうさま」

「やれやれ。主殿は言葉が少なくて困る」

萩は肩を竦め、紅葉は慌てて鬼灯の着物の袖を掴んだ。

「あつ…ねえ！ねえ、鬼灯とうさま！」

袖を引きながらも、なかなか言い出せない様子の紅葉に、察して鬼灯は小さな娘の手を握る。紅葉は途端に顔を輝かせ、大きな歓声を上げた。

「ひゃあ！鬼灯とうさま、とうさまと歩くのって、とってもとっても楽しいのねっ」

頬を上気させ、満面の笑顔を浮かべる紅葉に、鬼灯は眩しいものを見るように目を細める。

鬼灯は、二人を想うが故に別れを決意した。

その選択が、紅葉から父も母も奪う事になるとは気付かずに。

沢山の後悔と、沢山の悲しみを抱え、鬼灯は娘を守る事を決意する。今も愛する妻の記憶に支えられ、彼女がのこしてくれた何よりも大切な娘の幸福を願い、前を向く。

紅葉のいない、この世界で――――

もうすぐ、彼女と別れて七度目の冬がくる。

2・竜と生贄―5（後書き）

読んでいただいております！

これで二章に当たる竜と生贄は終わります。次からは現代に戻って、鬼灯、紅葉、萩での旅の続きのお話です。

書き溜めはここまでなので、今後更新がゆっくりになる可能性はありますが…

今後、気長にお付き合いを続けていただければ嬉しいです。

それでは、後書きまで読んでいただいて、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4497y/>

竜のアト

2011年11月24日01時49分発行